

日本記者クラブ会報

東京都千代田区内幸町二丁目
日本プレスセンタービル9階
◎社団法人 日本記者クラブ
電話〇三・五〇三・二七二一

「自由のための金ペン賞」受賞

J・P・ロセス 元マニラタイムズ社主

“国益”よりは“人間”に注目を



昭和60年5月13日(月)
司会 有馬真喜子企画委員

司会 本日の昼食会ゲストをご紹介します。一九八五年度の「自由のための金ペン賞」の受賞者でいらっしゃる、フィリピンのJ・P・ロセスさんです。ロセスさんは、マニラタイムズ社を築きあげた方です。さん下に「マニラタイムズ」のほか、新聞、雑誌、テレビ、ラジオ各社を有し、フィリピンのマスコミ界の重鎮でいらしたわけです。

しかし、一九七二年に戒厳令が發布されて以後は、それまでの自由な新聞発行ができなくなりまして。投獄、自宅拘禁という経験を繰り返されたわけですが。したがって、現在は直接新聞発行の仕事には携わっていらっしやいません。しかし、フィリピンのジャーナリズム界には、ロセスさんの薫陶を受けたたくさ

んのジャーナリストの方々がいて、ロセスさんはフィリピン・ジャーナリズムの父として、多くの方々に影響を与え続けていらっしやいます。

今回の「自由のための金ペン賞」は、フィリピンおよび東南アジア新聞界の自由の擁護、回復に対する献身的な永年にわたる行動に対して、授賞されたものであります。

この「自由のための金ペン賞」は、国際新聞発行者協会(FIEJ)が、一九六一年から世界各国の言論の自由を守った新聞人に対して与えているものでして、八四、八三年は該当者なしということになっております。その前八二年はニカラグアのペドロ・ホアキン・チャモロ氏が受賞しております。

それでは最初にスピーチをお願いいたしました。そのあとで質問ということにさせていただきますと思います。

ロセス 有馬さん、それから同僚各位、本日、こちらにうかがう前、私は帝国ホテルで「自由のための金ペン賞」をいただきました。江尻さん(新聞協会)には、そのあと、帝国ホテルからこちらまで歩けないだろうかとうかがったのですが、「身辺の安全のためにも車を使ったほうがいい」との答えでした。しかし、私は、やはり、歩くべきだったと思います。途中、私の身の上になにか起こって、皆さん方がニュースを書くネタができたのではないかと思ったわけです。「すべてはフィリピンの大統領が絡んでいる」というふうな説明をつけることができるわけです。(笑)

今回、FIEJから日本に招かれ、また本日、日本記者クラブのゲストとしてご招待いただきましたことを、心底から榮誉だと思っております。

今世紀後半の日本の成長および発展は、まさに現代の奇跡といふべきものであったと思います。この奇跡は、アジアの他の諸国の人びとの心をひきつけ、日本

目次

- 「国益」よりは「人間」に注目を……………1
- J・P・ロセス 元マニラタイムズ社主
- 「夢千代日記」を撮り終えて……………7
- 吉永小百合
- ◆今号は会員のご家族の方々にもお読みいただきたいと考え、編集いたしました。

の皆さんからぜひ学びたい、という強い願望を植えつけてきました。フィリピンのような国から来ました私にとって、このようなたぶんもっとも称賛されるべき国の皆さま方に、また、ひょっとしたらもうすでにそこに到達しておられるかもしれないけれども、必ずやその偉大さの頂上に達するであろう、日本国民の皆さまに、このようにお話しあげることが、まことに僥倖な気がいたします。

はなやかだった祖国の出発

わが国を、またわが国民を、私は心から愛しています。ですから、本日、ここで皆さま方にお話するに際して、フィリピンがいかに元気にやっているかをお話できればと望むわけです。しかし、まさにその正反対のことを申しあげなければいけないということは、何とも心悲しいことです。政治、経済、また教育、社会保障のいろいろの面において、第二次大戦以降五〇年代末あるいは六〇年代初頭まで、フィリピンが、ASEANの他の諸国、つまり、インドネシア、マレーシア、タイ、シンガポールよりも先に立っていた、ということには疑いの余地がなかったのです。ASEAN諸国の中で、政治的独立を最初に勝ち得たのも、フィリピンでした。国連の正式加盟国に認められたのも、フィリピンが最初でした。一九四七年のことです。

フィリピンは、またASEAN諸国で最初に、正式の選挙手続きによって選ばれた議員による、自由かつ独立した議会を持ちました。これらの議員たちは、予算配分、課税、そして法律公布に関する全権を与えられていました。議員により起草され、自由意思による

国民投票によって認められた憲法を、最初に持ったのもフィリピンです。もちろん国民投票は法の手続きのひとつとして行われたものです。

フィリピンにはまた、独立した司法と確立された公務員制度が存在するに至ったのです。また米国の制度に準拠した大統領制をもしました。そして政党から政党へと、平和な形で、しかも秩序ある形で政権が渡されていくようなメカニズムも存在していました。このようなメカニズムを通して、わが国の安定と政府の継続性も保障されました。

フィリピンの軍隊は、明らかに文民統制のもとに置かれておりました。彼らは文民の機能からは完全に離れており、つねに兵舎にとどまり、外国からの侵略に備えて臨戦態勢を保ち待機していたのであります。フィリピンの軍隊は、理論的にもまた実際のにも、決して国民に対して、その力を行使するものではなかったのです。

いま集中強化治療室の患者に

しかし、今日、フィリピンは、ASEANの中の病める加盟国と呼ばれる国になってしまいました。ASEANの中では唯一、国境の外からの共産主義の脅威には直面していませんけれども、国内の反体制活動が日増しに増大する国になっています。

政治的にはフィリピンは、いまや何らかの大手術を必要としているかのように見えます。経済的にはIMF(国際通貨基金)のICU、つまり集中強化治療室に入れられているということができましよう。いまではフィリピンの政府高官は誰一人として、IMFや世銀

あるいはその他のフィリピンに対する主要債権者からの、何らかの好意的措置に依存することなくして、フィリピンの将来に関する声明を出すことは不可能です。

今世紀中葉において、ASEANの地域では、いろいろな意味で第一位という状態であった私どもの国は、いま世紀末に近づくに際して、グループの一番底に落ちてしまいました。ASEANで一位であった国が、いまや最後になってしまったようです。現在ASEANの中でも、国民総生産は一番低く、一人当たりの国民所得も一番低い。インフレ率は一番高く、そして成長率は一番低いのです。

私は、経済の専門家ではありません。政府の正式統計による数字を、ここで申しあげることが差しひかえたいと思います。というのはフィリピン政府の正式統計が、その正確さにおいて評判があまりかんばしくないからでもあります。また、政治的な野党側の数字を申しあげることが差し控えたいと思います。ですから、ここでは、中立的でしかも極めて信頼でき、かつ最も知識の備わった情報源、つまり「ビジネス・デイ」という、今日わが国では最先端をいく、経済新聞の情報にもとづいて申しあげたいと思います。

一九八四年初頭といえますと、世界全体がスランプを経験していた時期ですが、その当時、私どもの指導者は、私どもの貿易パートナー諸国が不況から回復すれば、すぐフィリピンも回復に向かうのだ、と言ったものでした。いま貿易パートナー諸国は、この不況を克服し回復しています。彼らの経済はうまく進展していますし、継続的な成長も示されていますが、フィリピンはいまだそうはなっていません。

最も懸念される労働問題

今日、フィリピンで最も懸念すべきことの一つは、労働環境の問題であります。これが政治化していきましても、もちろんフィリピンには、いまに限らず以前から、ほかの国々と同様、労働問題は存在してきましました。しかし、それは労働問題という事に尽きたので、す。たとえば、それは賃上げ、労働時間の規制、付加給付、社会保障等の問題でした。その当時から大半の人びとが懸念していたように、現在、わが国が抱える巨額の対外債務が、国内の労使関係の緊張を増幅させてきています。組合の急進派は、日増しに政治的な立場をとるようになってきています。「ビジネス・デイ」の記事の抜粋を紹介いたします。「日増しにより多くの組合が、ただ単に要求をめぐって交渉するだけではなく、いろいろな旗を掲げ吹き流しを持ち、彼ら自身が働いている会社や経営陣を非難し、さらにIMFや世銀、また彼らが好んでそう呼ぶところの「米—マルコス独裁体制」に対する、公の非難なども行うようになってきています」。

ここ一年半ほどのあいだに事務所や工場での職場放棄が増加してきています。一九八四年のわが国の労働雇用省の報告によりますと、二七七件のストならびにロックアウトが発生し、これは対前年比七七%増であったということです。このようにストライキの数が増えたと同時に、それに参加する労働者の数も増え、以前よりもストライキが長時間継続されるようになってきています。

すが、労働雇用省のリーダーシップのもとにいろいろと仲裁努力がなされ、労使間での自発的な解決が進められているのは、好ましいことだと思っています。これによって多くの、本来ならば発生したであろうストライキも回避されているわけです。多くの爆発寸前の状況も回避されました。

ストは極限状態にある経済の帰結

今日のように非常に政治的変動が激しい状況のもとでは、ストライキには政治的な動機づけがあつて、左翼地下運動によって操作されているのではないかと、との疑いが政界や指導者の側に生まれがちです。しかし、これらの労働者が左翼地下運動の扇動によって、より活発化し、そしていら立ってきているということではない、と私は思うのです。むしろ経済が極限状態にあるということの、論理的な帰結ではないかと思えます。

最近数か月間は、インフレに対する政府のコントロールもうまくいきつつある、という兆候が相当見られるようになってきていますが、一連のペソ切り下げによって物価は高騰し、その結果として労働者所得による購買力は実質的に削減されてしまっています。物価高騰の結果、強制的な賃金調整が必要とされてまいりました。強制的に賃金の調整を行いますと、それによってまたさらに物価の高騰が招かれてしまっています。いままでのところ相変わらず物価の上昇は続いており、そのペースは強制的な賃金調整よりも、足の速いものであります。

フィリピンの労働者たちは、日本を含めた債権国が

わが国に与えることになっていく財務的な救済パッケージが承認されれば、経済活動は再び活発になるであろう、との約束を与えられてきたわけです。そして、工場閉鎖を行った企業も、また活動を再開できるようになる、と言われたものです。しかし、これらの救済パッケージには、いろいろな紐がついています。このような紐がついているために、国内産業の再活性化が抑圧され、今後とも非常にきつい、しかも高価につく信用に依存せねばならないし、また政府支出も監督下に置かれる状況が続く、ということになるわけです。これらの要素はすべて、今後さらにペソを切り下げの方向に追い込む可能性があります。

緊縮政策が問題を政治化する

たとえばIMFは、公にはそうは言いませんけれども、しかし、つねに賃金抑制の政策を主張してきたわけです。このような政策は今後も続けられるのではないかと思えますし、それによってさらにフィリピンの労働運動は、政治の方向に押しやられることになると思えます。

わが国の労働大臣自身も次のように警告しています。国民一般との話し合いの場を設けずに、このような緊縮政策を行っていくことは、国の独立を奪おうという、また貧しい者から搾取しようという国際的な謀略があるのではないかと、猜疑心を生みかねない、と。さらに彼はこのように付言しています。労働者や土地を持たぬ者や百姓また小規模商人たち、こういった途上国社会における恵まれぬほう大な数の人びとは、高インフレ率、あるいは実質賃金削減、極

端な政府支出削減、あるいはレイ・オフ、さらに信用の欠乏といった状況から、いわば強制的な犠牲を担わされてしまう。これは高金利が存在するからであり、その結果の調整政策というのは、弾圧政策のような側面を露出し始め、略奪が急速に重大な問題として政治化されてしまっている。

しかし、いまやフィリピン人は絶望の淵に立たされている、とは決して思わないでいただきたい。数多くの難題を抱えています。けれども、わが国には十分な数の善意の人びともいます。民主主義を信じる人びとの数もまだ十分だと思います。これら一般の人びとの気持ちこそが、いまだ十分に活用されていない力の源である、と思います。

平和への道に身を捧げて

平和への道に対して、私どもは一身を捧げています。そして今後とも変革を求めるに当たって、最も平和的な手段を使うべく努力していくものであります。皆さま方のような善良で友情にあふれる、近隣諸国の人びとの助けと理解をもって、私どもは今後とも決してこのレースから落伍することがないようにしていくつもりです。そして以前、私どもが立っていたような先頭の位置に戻るべく、努力していきたいと思えます。

フィリピンには、今日、山にたてこもって戦っている人びともいます。必ずしも彼らとつねに意見が一致するわけではありません。しかし、彼らの気持ちはよく分かります。彼らの多くは不正義による犠牲者なのです。彼らはすっかり、わが国の指導者に対する信頼を失ってしまったのです。わが国の体制を、すでに信

頼し得なくなってしまう彼らですが、しかし、わが国を愛する気持ちでは、決して他に引けを取るものではないと思えます。

ほとんど毎日のように、私自身は、いわゆる「街頭議会」に参加しています。なぜか、と疑問に思われるかも知れません。答えは極めて単純です。もしわが国に国民の真の声が届く真の議会が存在するならば、このような「街頭議会」の必要性はあるでしょうか。もし、代議制が議会を通して十分に機能しているということであれば、「街頭議会」というのは蛇足になってしまいます。しかし、そのような体制が崩壊したところでは、「街頭議会」が必要になってくるのです。

先ほど申しましたように、私どもは、民主主義的プロセスに対する信頼の念を失っておりません。幻滅を味わうことが何度あろうと、これからも前進を続けていこうと考えています。自由を阻害するものから離れ、自由に解き放たれる方向に前進していきます。

地図を見ますと、日本はつねに私の国のま上に存在しています。多くの意味で、フィリピンは日本を見上げていかなければいけない、と私は考えています。模範として、またフィリピンを支持し、協力してくれる国として、私どもは日本に頼ることはよいことだ、と考えています。(拍手)

司会 どうもありがとうございます。会場からカードで質問が寄せられていますので、それをうかがってみたいと思います。

フィリピン国民は、あなたが「自由のための金ペン賞」を受賞されたのを、どのようにして知るのでしょうか。政府系の新聞には報道されないと考えます。今度の受賞のような情報は、どのようにして報道される

のでしょうか。

受賞報道は反政府系小新聞が

ロセス フィリピンの一般大衆は、私がこの賞を受けたことを喜ばしく思うでしょうし、誇りに思ってくれるものと思います。政府の反応がどういふことになるか、私には分かりません。ただ、同僚の皆さまには、はっきり申し上げたいと思いますが、私は、立ち上がったからには、これからはと立ち上がったまままで進んで行くつもりです。この立ち上がるということと自体が、また新聞の価値でもあると思うわけです。ですから、ここにご参会の同僚の皆さまを、決してごっかりさせることはないと考えております。

フィリピンには、非常に元気に活動しつつある四紙ないしは五紙のオルタナティブ・プレス(反政府系小新聞)があります。それから非常に勇敢な放送者もいるわけです。彼らが自らリスクをおかして、ニュースを流すだろうと思います。ですから、こういったリスクを自らおかす人びとが放送し、あるいはニュースを印刷するということになると思えます。フィリピン政府は、フィリピンには報道の自由がある、と言います。確かにそうかもしれません。人びとは書きたいことを印刷し、主張することはできません。しかし、それは自らリスクをおかしてやらなければいけないことで、書いた結果あるいは話した結果、逮捕されるか、突然殺されるか、全く分からないわけです。昨年一年間だけでも、たしか一二人のラジオ、あるいは新聞の記者が殺されています。

私は、学生や労働者、その他いろいろな専門職の人

びととデモをいたします。デモをしているあいだに拉致された人の数も二〇人ぐらいのぼっています。彼らはマニラ郊外に連れ出され、そして殺されてしまいます。全く死体が発見されていない人びともいます。ある死体の見つかった人の場合には、手を縛られて拷問を受けたあとがありましたし、中には首のない死体もありました。

いま申しあげた人数は、これは政府統計によるものです。しかし、戒厳令が宣告されてからすでに六万人が逮捕され、また実際に殺された人の数は一〇万人を超えているという状態です。この一〇万人というのは、たとえば反乱軍と戦ったり、あるいは政府と反体制派との間で交わされた銃弾に当たって、殺された一般市民なども含まれている数字ですが、これは朝鮮動乱あるいはまたベトナム戦争での、戦死者を超えるものではないかと思えます。

比国で闘う同僚を誇りに思う

司会 オルタナティブ・プレスを中心に、フィリピンのプレスの現状およびその近い将来についてどのように考えているか、おきかせいただきたいと思えます。

ロセス 将来については、楽観的になることができればと望むものです。新聞発行者として、なぜ、新聞発行を再開しないのだ、ときかれることがあるわけですが、それに対しては、こう答えます。まだ戒厳令は撤回されていない、と。紙のレベルでは確かに、戒厳令が取り下げられたというものはあるかもしれませんが、実際にはそうはなっていません。私が編

集者や記者を使って新聞を発行して、彼らが逮捕され尋問された時、彼らを守ることができなければ、私には決して新聞を発行することはできない。もちろん私がかつての新聞の編集者あるいは記者に自ら取ってかわってなる、ということは喜んでやりたいと思えますけれども、それぞれの新聞はまた好みの人を雇い使うということ、私がすぐにそこに入れるわけでもありません。

私が、今朝、受賞に際して申しあげたスピーチのテキストを入手していただきたいと思えます。その中でできるだけ明解に、しかも客観的にフィリピンのプレスの現状について触れております。新聞人として私は、いまフィリピンで闘っている人びと、新聞記者たちのことを大変誇りに思います。彼らは、自ら信ずるところのために、命をかけて活動しています。彼らこそ最も称賛されるべき存在ではないかと思えます。

司会 八三年のアキノ事件直後盛りあがった反マルコス運動も、最近ではデモ動員数などから見ると衰えたように思われますが、アキノ事件直後の市民たちの力はどこへ行ったのでしょうか。今後の反マルコス運動の見通しをおきかせください。またマルコス大統領の病状についてお知りの方がございましたら、お知らせください。

アキノは帰るべきでなかった

ロセス ベニグノ・アキノが帰ってきた時、私は空港に行っていました。私も、彼を出迎えに行った一万五、〇〇〇人の中の一人だったわけです。空港の中ではなくて、一般大衆と同じく、外で私は待っていました。

た。彼の殺害が私にいかにもショックであったかについては、申しあげるまでもないことだと思います。彼は十七歳の頃、「マニラタイムズ」の記者として、朝鮮動乱の従軍記者を務めております。私が「マニラタイムズ」の発行者でした。ですから、彼は新聞人だったわけで、また私の家族に非常に近い関係にありまして、私のことを「お父さん」と呼んでおりました。彼が帰ってきたのは誤りであったと思えます。自分の身には何も起こらないであろうと、少し過小評価し過ぎたのではなからうかと思えます。多くの人びとにとりましても大変なショックでした。

ただ日本の皆さま、また世界のほかの国々の人びとのほうが、平均的なフィリピン人よりは、その事態をすぐさま知ることができたわけです。フィリピンでは、アキノ事件はすぐに報道されず、時間を経て少しずつ表に出されるということでした。日本の方々は、すぐテレビでこの事件を知ることができたでしょうけれども、フィリピンの場合には、三日後になってようやくニュースが出る、というような状況でした。これがわが国のマスコミ界の現状であるわけです。

私は、毎日、あるいは場合によっては週三回ぐらいのこともあります。学生、労働者、また貧しい都会の住人たちとデモ行進をしています。教師や弁護士なども参加することがありますけれども、一五万人、一〇万人、あるいは五、〇〇〇人、日によっては一、〇〇〇人ぐらいしか集まらないこともあります。しかし、私どもはデモ行進を続けていきます。

私は、決して選挙というものを信じません。独裁政権のもとでは、自由かつ公明正大な選挙などはあり得ないからです。また、選挙を通して元首を替える、と

人にも侵すことを許さないでしょう。今回、「自由のため金のペン賞」をいただき、これをもってさらに私は、努力を倍加していくことを皆さま方にお約束申しあげ、決して皆さまを失望させることはない、と申しあげたいと思います。

司会 どうもありがとうございます。

それでは最後に、日本記者クラブからの記念品をロセスさんにお贈りしたいと思います。シルバーの万年筆でございますが、贈ります私たちのロセスさんへの尊敬の心は、金のペンにも劣らないというふうに思います。

ロセス 本当に忍耐強くご静聴いただきましてありがとうございます。(拍手)

(文責・編集部)

ホアキン・P・ロセス氏略歴 一九一三年ドン・アレハンドロ・ロセス・シニアの末子として生まれ、マニラとロンドンで教育を受け、一族の経営する新聞グループで実務教育を受ける。第二次大戦後、マニラタイムズ・パブリッシング社を比国最大の新聞グループに発展させた。しかし、一九七二年の戒厳令によって逮捕、拘禁され、出獄後さん下メディアの売却を余儀なくされ、その後は比国の民主的制度回復のため活動、いまも同国の編集者から「ジャーナリズムの父」と敬慕される。比国新聞発行者協会会長、アジア新聞財団会長、マニラ外人記者クラブ会長、IPI(国際新聞編集者協会)理事等を歴任。

◇吉永小百合さんを囲む会◇

「夢千代日記」を撮り終えて



昭和60年5月9日(木)
司会 藤村邦苗企画委員長

司会 今日は吉永小百合さんをお招きしました。皆さんよくご存じの方ですので、ご紹介は省かせていただきます。最初にちょっとごあいさついただき、後は自由に懇談するという形にしたいと思います。なお、私は企画を担当している藤村です。よろしくご協力願います。それでは吉永さん、よろしく。(拍手)

吉永 吉永でございます。今日はこの席に呼んでいただきまして、大変にうれしく光栄に思っております。ただ、台詞をしゃべるのはまあ得意なのですが、わたし自身の言葉で話すというのは不得手なので、うまくお話できるか心配ですが、最初に少しだけいまわたしの仕事と心境みたいなことをお話させていただきます。と思います。

正式に映画の世界に入りましてから、今年でちょうど二五年がたちました。これまでに九七本の映画に出演しまして、いまその九七本目を撮り終えたところで

す。それは「夢千代日記」という、四年間NHKテレビの「人間模様」というワケで放映したものです。わたしにとって一生のうちにも多分一度か二度ではないかと思えるような、大変に素敵な役でございます。その役を最後に映画で演じることにより、この役と別れることになり、いまその夢千代の死ぬところを撮り終えて、ホッとしているところでございます。

あの……映画界に入りましてけれども、途中で映画が衰退してまいりまして、わたし自身もテレビのドラマに出演するようになりました。その後結婚しまして、しばらく仕事を休んだり、まあ細々とやっております。ところが、いまから五年くらい前になると思いましたが、「動乱」という映画で、高倉健さんと共演させていただきました。その時の監督が森谷司郎さんでございます。今年の十二月にお亡くなりになったのですが、大変に映画を愛する方でした。高倉さんももちろん映画俳優の中の映画俳優というふうな方で、

そういうもう本当に映画の好きな人たちの中で、仕事をさせていただいているうちに、もう一回映画の世界で地に足をつけて頑張ってみたい、と思うようになりました。そして、ここ五年間ほどはほとんど映画の仕事だけをさせていただいています。もうすぐ一〇〇本という区切りになってまいりまして、なんとかい形で一〇〇本目を撮り終えたいと思っております。かなうことならずと、その……年齢はだんだんとっていくわけですから、その年代その年代の女というものを演じて、映画の世界で生きていけたらいいと思っています。どうぞこれからもよろしくお願い申し上げます。

司会 俳優の仕事と主婦の仕事、両方をどういうふうに両立されておられるのか。これは私の家内がぜひきいてくるようにと申しておりますので、司会者の役得で最初に……。

◆連れ合いの巻き込みセリフのけい古

吉永 結婚しますまでは目玉焼きしかできないような状態でしたけれども、結婚しましてから一生懸命、本とかテレビの番組で料理を覚えたりして、一年間まったく仕事をせずに家のことだけをやっていました。そうしたら、家のことも少しはできるようにになりました……。そのうちまただんだん仕事の量が増えてまいりまして、どうしても……。普通の仕事をしていたら、むしろ大変なものでしょうが、わたしたちの場合は、役にしなければならぬわけです。自分じゃない他人になるという作業の中でイライラしたり、ヒステリックになつたりすること

があるんです。そういうことをなるべく家庭に持ち込まないようにと、自分で決めまして、家から一歩出たら仕事に没頭して、家に帰ってきたら、もう撮影のこととは忘れて、まったく一人の女性になっていた、と思っております。

それでもやっぱり、その日の仕事がいかになくて、家に帰っても、これはちょっと長引きそうだなあ、というような時は、家が麻布のほうでございまして、六本木あたりで寄り道して衝動買いなどしまして、気分転換をして帰ったりもします。

台詞を覚える作業というのは、仕事場だけではできない場合もあるんですけども、そういう時はなるべく家の者のいないスキに覚えるとか、あるいはどうしようもない場合には、逆に連れ合いを巻き込みまして台詞の相手をさせたりして……(笑い)。あまり家のことを放ったらかして仕事をするという雰囲気を見せないようにはしているつもりなんですけれども。

ただ、性格的に大変楽天的といえますか、呑気なものですから、大変なことがあってもあんまり深刻に考えないようにして、イヤなことはすぐ忘れるということができますので、その点では楽だと思っております。

司会 お酒は召しあがるんですか？

吉永 そうですね。十代の頃は強かったんですけど(笑い)、最近は大変弱くなりました、ワインをグラス二杯ぐらいしか、いまはいただかないんですけれども。

司会 しかし、六本木に寄り道して……？

吉永 いいえ、お酒はいただかないんです。セーターを買うとか、ブラウスを買うとか、買物をしたりしまして気分転換を図るとい……。

司会 なるほど。実はちょっと打ち明けた話で恐縮ですが、ご主人の岡田太郎さんはフジテレビの編成局長で、プロデューサーでございませうけれども、非常に温厚ないい男で、ただ去年体を悪くして入院を二回ほどされたんじゃないですか。

吉永 そうです。

司会 その時は、吉永さんは看病をされて……？

吉永 ええ、仕事のない限りは病院で付き添っておりましたけれども。

司会 お宅にはお手伝いさんなんかいて……？

吉永 通いで家のことをやってくださる人がいます……。

司会 疲れませんか。

一に体力二に体力三、四なくて演技力

吉永 体力にはとにかく自信がありません、健康なことが一番の取り柄なので多少無理がきくんですね。わたしがあんまり健康なために、夫のほうに病気になるってしまったんだと、皆さんに言われてしまいました(笑い)。わたしも少しどこが悪いところをつくらなければいけないかな、と思うんですけども小さい時は弱かったんですが、なぜか映画の仕事をするようになりましてからはほとんどん丈夫になって、それだから二五年間もやってこられたんだなあ、と思うんです。

やはり、わたしたちの仕事は、一に体力、二に体力、三、四がなくて、五に演技力ぐら……。いえ、そうじゃない方もたくさんいらっしゃると思うんですけれども、わたしの場合は、どうもそういう感じ

です。本当に健康でいままでやってこられたのはラッキーだったと思っています。

司会 名譽のために申しあげますと、代々木中学ではオール5だったそうできて、オール5は、その後一〇年間一人もいなかった、とか？

吉永 いいえ、そういうことを劇作家の野田秀樹さんが何かに書いていらしたのを、ちよつと拝読したんですけれども、わたし、オール5だったことはなかったような気がするので、野田さんが創ってくださいったんじゃないかなあ、という気がします。

司会 野田さんがオール5を取ったら、先生が「この学校でオール5をとったのは吉永小百合以来一〇年ぶりだ」と……。

吉永 それは野田さんの大変お上手な脚色ではないかなあ、と思うんですけども。(笑い)

司会 体力だけではないことは確かでありまして。

藤岡(山陽) 吉永さんはスポーツがお好きですね。

吉永 はい。

藤岡 どういうことをおやりになっていますか。乗馬なんかも相変わらずおやりになっていますか。

吉永 学生時代に馬術部というのに入りました。なぜ入ったかという、運動部に入ると、体操の授業を受けなくても単位がもらえるというので、そういう大変よこしまな気持ちで入ったんですけども、結局、仕事と学校と両立することが難しくなっていて、泣く泣くその馬術部のほうはあきらめたんです。馬術部のキャプテンをしていらした方が、いま北海道の日高で牧場をやっています、乗馬クラブもやっていますしやるので、一年に一度か二度ぐらい北海道へ馬に乗りに行くんです。それが大変楽しみなんですけど、まだ東京

で乗るほどの腕前ではないんです。

スキーはもう一五年以上になると思うんですけど、スキーのほうは、まあ、一応どんな斜面でも転ばずに、自分なりの滑り方で降りてこられるというような程度なんですけれども。あと、自分の体力を維持するために、ジョギングみたいなこともやっております。

司会 そのジョギングはどこで、どんなスタイルでなさるんですか。(笑い)

吉永 家の周辺なんですけれども、帽子をま深にかぶりまして、それとサンダラスみたいなのをしてやりますが、わたしの家の近くは大使館が多くて、警察の方がいとも監視していらつしやるんですね。なんか怪しげな女がいるな、という感じで見られてしまいます。(笑い)

野坂昭如もビックリのラグビー応援

司会 ラグビーもお好きなんじゃないですか。

吉永 え、ラグビーはやるわけにいかないんですけど、もっぱら応援なんですけれども。そうですね。ラグビーのシーズンになりますと、日曜日で仕事がない日はほとんど秩父宮ラグビー場とか、国立競技場にまいりまして声援を送っております。ちよつと声援のしかたが異常というか、とにかく……。

司会 どうぞ、やってみてください。

吉永 いえ……。(笑い)もう、とにかくひどいんですね。「潰せエーツ」とか、「突っ込めエー」とか。女性とは思えないような応援をするので、ご一緒に見に行った方がびっくりなさって、相当ショックを受け

られるみたいなんです。

一〇年ぐらい前に、野坂昭如さんからお誘いをいただいて、ご一緒にラグビーを見に行つたんですけども、その時、野坂さんがウイスキーのストレートを「体が温まるから飲みなさい」とおっしゃってくださったんですね。それを飲んだために、なお体がカッカしていい気持ちになって、精いっぱい応援をしましたから、野坂さんがびっくりなさって、そのことを週刊誌に書かれました。わたしはとっても恥ずかしかったんですけど。(笑い)

今年の一月十五日の日本選手権には、タモリさんとフジテレビのプロデューサーの横沢さんと、三人で行きました。なるべくタモリさんががっかりするようなことのないようにと、自分を抑えたつもりなんですけど、それでもやっぱりだんだん試合が白熱してまいりますと、大きな声を出してしまうんですね。

だから、わたしは役では、どちらかというと最近はおかえ目な優しいおしとやかな役が多いんですけど、本質的には大変お転婆で天衣無縫なんじゃないかなあ、と、そういう時の自分を、もう一人の自分が見て思うんです。大変お転婆なようです。

胸にとび込んでこない、中曽根さん

今井(個人) 私は、藤村君と同じサンケイ新聞におりまして、フジ・サンケイグループですので、そういう関係からいいますと、吉永さんのご主人とはまんざらご縁がないわけじゃない。また私の家内ともども昔から吉永さんのファンであるということ。そこで、あえて質問にまかり出たというわけです。

私、政治部記者のOBでして、政治以外何事も知りませんので、政治絡みの質問を一、二試みてみたいと思います。

中曽根総理は国会とか自民党ではあまり評判がよくないんですよ。ところが先般サミットなどへ行きまして、なかなか奮闘してきたということもありまして、国民のあいだでは大変人気があるんですね。世論調査をすると、いつも五〇％——この五〇％というのは大変な数字なんですけれども——前後の支持率を取っているというような総理大臣です。吉永さんなどがご覧になって、この中曽根康弘タイプの政治家はどうでございましょうかな。ご意見をうかがわせていただければ大変ありがたいんですが。

吉永 そうですねえ……。それは大変難しいご質問で……。(しばらく考えて)

あの、直接お話ししたこともないので、本当はどういう方なのかというのが、新聞とかテレビでのインタビューにお答えになっているところからは、よく分からないんですね。きちんといつもお話になっていて、失敗をなさったり、失言をなさったりすることが少ないから、わたしたちがどういう方かって受けとめるところまでいかない、それがとても残念というか、そんな感じがいたします。

今井 実際にお会いにならないと、なかなか分からない？ テレビのブラウン管だとか、そういうものは、よく認識できないということですか。

吉永 そうですね。直接わたしたちの胸に、飛び込んできてくださるようなタイプの方ではないような気が、わたしはするんですけれども。外国の政治家の方は、わたしはほとんど存じあげないんですけれども、

去年たまたま十一月に、日中文化交流協会の会員として、井上靖先生が団長でしたが、訪中しまして、その時に胡耀邦総書記にお目にかかったんですね。あまりフランクにわたしたちに語りかけてくださるのにびっくりして、とにかくある意味でショックでした。それがわたしにはショックだったし、また素敵だったので、そういうふうにご自分のほうからバツと、わたしたちの方へアプローチしてくださるということが、日本の政治家の方にもあるといいなと、そういう思いがいたしました。

今井 何かのチャンスで一度お会いになると、あるいはまた認識がお変わりになるかもしれないですね。どうもありがとうございます。

吉永 どうも失礼いたしました。

司会 中曽根さんも、外国の女優さんがくると、大変フランクにやっているようです。

吉永 はア……。(笑い)

自分で好きなのは「キューポラのある街」

高田(名譽会員) いままで九七本の映画に出演されて、これが私だ、というような役柄の映画はありましたか。

吉永 そうですね。皆さんに評価していただくものと、自分が大変好きだということも、多少違うこともあるんですけれども、それが一致したというのは、やはり「キューポラのある街」という十代の時に撮った作品です。その作品が一番だと思えます。それから、わたし個人が、映画界でもう一度やってみようと思意するきっかけになりました「動乱」。あの映画の

薫という役も大変好きな役です。

司会 「キューポラのある街」で、どうしてわたしだな、という感じを受けられたのか、そのへんをもうちょっと……。

吉永 川口という鑄物の町で、大変貧しい家庭に生まれ育っているのですけれども、いつも明るさを失わないという点、前に向かって走っていくという感じが……。わたしの家も、子供の頃から大変貧乏でございまして、たまたま山の手ではございましてけれども、そういう意味では似ているということもありました。それと、主人公のジュンという女性が、いつも考えている少女だったんですね。その考えている役を考えながら演じたというのは、「キューポラのある街」がわたしにはじめてでした。それまではベルトコンベアに乗って、「次、この役やるからやりなさい」と会社から言われて演じていました。ですから、わたしにとって、やはり、あれはターニングポイントになっている作品だと思います。

司会 大変いい映画です。私もあれ以来サニリストになってしまったんですけれども。

ジェームズ(ロサンゼルス・タイムズ) 私はふだん政治、経済を取材していて、映画の俳優とはあまり会ったことがないんです。数人のハリウッドの俳優と、東京で会ったことはあります。その方々とあなたおよび日本の映画界全体の俳優との大きな違いの一つは、マスコミに対して非常に親切なんです。たとえばきょうあなたは、何か特別に宣伝目的があつてここへいらっしゃっているわけではない。向こうでは、何か宣伝したいことがあればマスコミに会いますが、それ以外は一切避けるんですね。プライベートが害され

ることを非常に気にします。日本の場合には、結婚を發表する記者会見さえもやっています。(笑い) 向こうは、こっそり秘密のうちに結婚するんですけれども、その違いはなぜだと思われませんか。

芸能人である前に人間でありたい

吉永 二五年間やってまいりましたが、最近はずマスのコミの、特に芸能界へのアタックが激しさを増しているように感じております。わたしたちがデビューした頃は、そういうのはほとんどございませんでしたし、プライベートな生活はきちんとあったような気がするんです。いまの日本というのは、一億総タレントというのでしょいか、誰でもベッとテレビに出てタレントになっていけるような、むしろ素人が出るほうが新鮮で素敵だというような時代なので、プライベートを放棄するというか、プライベートな面を露出するほうが、大衆にアピールするみたいな部分があるかもしれません。そういうふうと考えていらっしゃる方が多いのかもしれないですね、芸能界でも。

基本的には、やはり、俳優でも歌手でも、きちんと人間らしい自分の生活は、自分の手で守っていかなければいけないものだ、と私自身は思っています。結婚する前は、とにかく人間である前に女優である、みたいな生活をしておりましたけれど、いまは自分の人間的な部分を一番大事にして生きていきたいと思っています。あんまり愛想よくする必要はないと思っただけですけれども……。きょうは、いつも芸能、映画関係の記者の方々とだけしかお話しする機会がないので、そうじゃない場所で、いろんな分野の記者の皆さまと

お話できるというので、私自身の楽しみのために出席させていただきました。

小巻(毎日放送) 先日、新聞を見ておりましたら、上野千鶴子さんが、吉永さんの魅力について、一刀両断と言いますか、お書きになっている。ちょっと申しますと、日本で人気のあるのはおばさん・少女である。つまり、それは吉永小百合さんのようなものである。これは日本の男性のどうしようもないロリータ・コンプレックスに根ざしているんだ、と……。

吉永 ホッホホホ……。

小巻 つまり成熟した女を愛せない恐怖心、これがあるからじゃないだろうか、と。(笑い) 母親と少女というのは、女だけれども性的な匂いがない。そういう点で共通していて、男達に安心感を与える。こうおっしゃっているんですが、吉永さんご自身はご自分の人気と魅力をどう考えておられるか。ご自身で解剖していただいて、お聞かせ願えませんか。

吉永 わたしは少女でも母親でもないんで、どっちかといえば女でいたい、と思っっているほうなんです。昔、自分の映画が皆さんに受け入れられたというのには、高度成長期でみんなが一生懸命働いている時に、ひたむきに前へ進んで行く少女のイメージが、その時代とマッチしていたのだということを、何かで読みまして、ああ、そうだったんだな、と思ったことはあります……。ただ、いまわたしの映画を見てくださる方々は——これはまだわたし自身もはっきり分からないうのですけれども——私の演じている役のせいも多分にあると思うんですね。どっちかという、だんだんいまの女性は強くなってきて、強くなることはとてもいいことなんですけれども、その中で女らしい優

しさみたいなものが、少しずつ失われていっているのではないかな、と思います。その点、最近わたしが演じた「夢千代」にしても「おはん」にしても、どっちかといえばひかえ目な日本の古いタイプの女の中に、多少現代的な強さを秘めているという役なんです。その強さの部分が前に強く出まんで、ひかえ目になっていきますために、見る方が拒否反応を起こさないで、わりにノスタルジアみたいなものを持たれるのではないかなあ、と思います。

だから、このへんでわたしが一八〇度転換して、アッと驚くようなボーイッシュな役を演ったり、もっと自己主張の強い女を演った時にどうなんだろう、という気はします。(微笑をうかべて) だから演ってみたいと思うこともしばしば……。。

借金をするのは怖いんです

今(個人) 地方に経済講演に行くといろいろな質問を受けるのですが、たとえば熊本で皇太子ご夫妻に貯金通帳があるか、という質問を受けたことがあります。吉永さんは当然貯金通帳をお持ちだろうと思えます。そこであなたの金銭観について少しお話願えますか。老後の問題も含めて、どういように貯蓄をしていらっしゃるか。非常に俗っぽいけれども、一番大事なことだと思いますので。

吉永 正直なところ、わたしが映画の世界に入ったのは、こういう仕事が好きということもございましたけれども、経済的な理由がありました。上の学校へ行くためには、自分で学資を稼がなければならぬ、というふうな状態に家があったものですから、お金の大

切さというか、そういうことは子供の頃から身にしみて分かっていたつもりなんです。ただ長いこと、こういう仕事をしていますと、入ってくるお金も多くなりませんが、出て行くお金も多いわけですね。そうすると、普通の人の経済感覚というのがだんだんなくなってくる。まあ、わたしも例外でなく、この世界に入ってから一〇年ぐらい経った時には、ちょっとおかしくなっていたと思うんです。たまたま結婚しまして、まったく経済的にも無から出発したものですから、生まれて初めて銀行にも自分で行き、自分で働いたお金は自分できちんと管理していこう、という姿勢がその時に生まれました。いまは自分のところの経済状態とか、そういうことは把握しているつもりなんです。

小さい頃、大変貧乏だったということもあるものから、どうしても、やはり貯金をして残しておいたほうが老後のためにいいんじゃないかな、と思って、株とかとにかくに投資したり、不動産を買ってみようというようなことにはなかなかならないですね。まわりの方は、もう少し今後のことを考えて住んでいる家のこととか、環境とかそういうことも考えたほうがいいとかおっしゃって、いろいろ勧めてくださるんですけども、借金をするのが、大変怖いんです。

平田 (共同) 私の聞き間違いでなければ、先ほどのお話の中で、連れ合いという表現をご主人にお使いになったと思うのですけれども、吉永さんは女優ですからボキャブラリーが豊富なのだと思いますが、実生活においても、「連れ合い」という表現をお使いになられているんですか。

吉永 ふだん呼ぶ時ですか？

平田 呼ぶ時じゃなくて、他人に対して……。

吉永 はい。その時は、連れ合いというふうに申しますが。

平田 この点、名誉会員の村尾さんにコメントをお願いしたいんですが、「連れ合い」という表現はいかがでしょう。

村尾 (名誉会員・読売) さすがに吉永さんは素晴らしい言葉を使っている。ぼくも感心してたんです。主人と言うか、夫と言うか、うちの人と言うか、どれを使うかなと思つたら、連れ合いと言われた。この一言で吉永さんの知能指数がジョン・スチュアート・ミル程度であることを、私は保証します。(拍手)

司会 吉永さんはさつきから大変貧しくてとおっしゃっていますが、お父様は東大をお出になって外務省へ入省、吉永さんが昭和二十年三月、戦争が終わる直前に生まれて後、実業界に転進しますが、事業で失敗されたりなどして、苦勞をされたということのようです。

吉永 はい、そうです。

司会 上の学校へ行くために、仕事をした。

本当のプロになるのはこれから

吉永 そうです。アルバイトのつもりで、高校に入学する日に日活に入ったんです。

司会 どうしてそこへ入ったんですか。

吉永 たまたま父の友人が日活の宣伝部長をしておられたんです。それで入りまして、月給が一万円で、一本出ると二万円という条件でございました。

司会 何年のことですか。

吉永 昭和三十五年でしたから、その頃、アルバイトでこれ以上のものはないという感じでしたし、「一

年に二本映画に出ればいいでしょう」ということだったんです。それだったら十分に学校にも行かれるし、ということ、わたしも承諾したんですけれども、実際には、入った年に九本の映画に出まして、学校も二学期までは行けたんですけど、それ以後は行かれなくなってしまったんですね。出席日数が足りないために、もう進級できないと言われまして、最終的には高校は中退のような形になりました。

ですから、この仕事をどこで選んだか、というのが自分でよく分からないんですね。もちろん、小さい時から学芸会などに出て、お芝居をするのは好きだったのですけれども、ズーッとズーッとアルバイト気分できてしまったような気もするし、プロになるのは本当はこれからのかな、という思いも自分ではしているんです。

司会 いま高校中退とおっしゃいましたが、たしか早稲田を出られたのでは……。

吉永 ええ、それは大学の入学資格試験というのを受けて、それで大学に入ったんですけれど。

司会 受験勉強をしてくさか。

吉永 そうですね……、一応、少しはしました。

(笑い)

司会 やっぱりオール5ですね。

吉永 いいえ、そんなことないんですけど……(笑い)。

三上 (AP) 「戦争と人間」という映画が印象深く残っているんです。「夢千代日記」も戦争に関係がある。戦争と何らかの形で関わり合いのある映画に出ている、という感じが私の中にはあります。いま終戦から四十年、吉永さんは女優としては二十五年の航跡

をその上に残してきているわけですが、戦争と女について話していただけますか。

いつまでも「戦後」が続いてほしい

吉永 昭和二十年に生まれましたために、どうしても自分の年齢は隠せないですね。戦後何年というのと、自分の年齢になりますから（笑い）、もう、ずっとずっと隠さずにいきたいと思えますし、新しい戦争が起きてほしくないから、ずっと「戦後何年」ということだったらいいと思っていますけれども……。

「夢千代日記」の夢千代は広島で胎内被爆をしているわけですけども、わたしと同じ年齢で、ことさら自分としては親しみが湧くというか、わたしがいまこの年齢で、昭和二十年に生まれたからこそ大事に演じなければいけない、というふうにも感じたわけです。

よく戦争に反対するいろいろな団体とか、反核のサークルなどからお誘いがあった、講演依頼みたいなのがあるんですけども、わたし自身は、そういう場で話すことが大変不得手ですので、自分がお芝居をしていく中で、もしそういうことを声高じゃなくて静かに訴えられれば一番いいと思っています。自分が仕事を選ぶ時に、今後「夢千代日記」とか「戦争と人間」のような大きなテーマのものを、なるべくやらせていただきたいと思っています。

あくまで映画は娯楽の一部であると思いますから、そういう中で分かっていたらいいのは大変難しいことだと思えます。でも、自分の心の底にある戦争に対する嫌悪感とか、そういうものはいつまでも持っているし、夢千代のような役を演じる時には、しっか

りそういうものを踏まえた上でないと、できないんじゃないかな、と思っています。

太田（河北） ラジオでスタートして、テレビにもお出になり、映画のほうは一〇〇本をめざしているわけですが、舞台はいかがでしょうか。舞台人としての将来をどうお考えになつていらっしゃるか。あるいは舞台の魅力ということをどう考えていらっしゃるか。

土を踏んでいると安心するタイプ

吉永 舞台で芝居をしたことは一度もございませぬ。前に歌を唄っておりました時には、何度カリサイタルのような形で舞台に出演して、寸劇というかミニ・ミュージカルみたいなことはやっただけですけども、いまのところはできれば映像の世界で生きていきたい、と思うんですね。非常に不器用なものですから、舞台のお芝居を覚えてしまうと、映像の世界に戻った時に、どっちかといえば、いままで自然流という形でやってきたお芝居が、壊れちゃうんじゃないかな、という怖さがあるんですね。

それともう一つは、大変あきっぽい性格で、毎日毎日同じ台詞を決められた時間に言うというよりは、毎日、違う日を送りたいし、どっちかっていうと戸外が好きなんです。空とか、海とか、土とかそういうところで仕事をしたい。そのためには映画が一番なんです。映画の撮影所というのは古い建物が多くて、スタジオの中も土なんです。その土を踏んでいると安心するという、どっちかといえば、そういうタイプの人間なものですから、舞台よりは映像の世界ですとやっていけたらと、思っています。

テレビなどで杉村春子さんと何度か一緒に過ごさせていただいたりして、杉村先生のお芝居も随分拝見したんですけども、とてもいまからわたしが勉強しても、あんなふうに完璧に演じることはできないだろうし、というように恐れもございまして……。映画でもいままで、「あ、この作品は満足した」というものはないんですね。ですから、あまりいろいろやらずに、できれば映像の世界だけで生きていきたい、と思っています。

ジェームズン さっきご挨拶の中で、日本の映画が衰退してきたとおっしゃったんですけども、もちろんご自身が出た映画以外での質問ですが、現在の日本の映画をどう評価されますか、それから衰退してきた原因はどこにあると思いますか。

吉永 衰退してきた原因は、やはり、大変いい時期に次の時代のことを考えなかったというか、わたしたち映画人が勉強しなかったためじゃないかな、と思うんですね。新しい時代への対応が、とても遅れちゃったんだと思うんです。いまは、ひと頃の沈んだ状態よりはだいぶよくなっているし……、よくなっていると思いたいんです。今年は黒沢さんの作品もございませぬ、大きな作品にはわりにきちんとお金をかけて、いものが出てくる可能性が多くなっていると思えます。しかし、そうじゃなく、さり気なくみんなで見られるような、昔でいうとプログラム・ピクチャーというような形の作品の場合は、どうしてもお金もかけないし、頭もあんまり使わないで、簡単に作っちゃっているというものが多いうような気がいたします。それを、本当にこれからわたしたちで考えて、少しでもいい方向にもっていかれたらいいと思うのですが——。映画の中

だけ仕事をしていくのは、なかなか経済的にも大変ですし、どうしても映画人が映画に関わる時間が少なくなってきたらですね。生活のための副業のほうに忙しくなって、それで生活をしていかなきゃなりませんので……。だから、もう一回、地に足をつけてやっていけるだけの基盤をつくらなきゃならないし、それから、まあ、ないでしょうけど、どこかいつばいお金を出してくださる方がいらっしやらないかな、というふうな感じはいたします。

彼を含めた人との関係大切に

司会 物でもいいですし、人でもいいし、事柄でもいいんですけども、いま吉永さんが大事にしたいもの……。たしか、吉永さん、いまが大事だと……。

吉永 はい。未来ということはあまり考えないんですけど。未来は、今日を精いっぱい生きると未来につながるというふうに思っているものですから、いまこうしていることとか、このいつとき、いつときというものを自分で精いっぱい生きれば、それがきつとい形ですつとつながっていくんじゃないかなあ、というふうに思っております。

司会 その場合、いまの中で、あなたが大事にしていらっしやるものは何ですか。たとえば連れ合いさんとか……。

吉永 はい。そうですね。やはり、彼を含めた人ですね。友達とか。そういうものが一番基盤になっております。大事です。

ジェームズン さっきの私の質問に関連しておたずねしたいんですけども、次の時代を十分考えなかつ

た、とおっしゃったんですが、私は外人なのでよく分からなかったのですが、その「次の時代」というのはなんなのか、ご説明願いたいんですが。

吉永 映画しか娯楽がなかった時代から、テレビがパァーッと増えてきまして、テレビが面白くなっていった時代ですね。そういう時に、映画会社は、じゃ、テレビで見られない何をお客さんに提供していったらいいかというのを、もっと深刻に考えなければいけなかったんだらうと思うんですね。それをとても感じます。

司会 もうちょっと下世話にうかがっていいですか。

吉永 はい。

司会 隣で拝見していると、大変いい着物を着ていらっしやるんですけども、女優さんというのは着物をどのくらい持っていらっしやるんですか。いつも着物を着ていらっしやるんですか。それとも洋服ですか。

吉永 ふだんは、ほとんどパンツルックといいますが、ジーパンとかスポーティーな格好を家ではしております。たとえばトレーナーとジーパンのような大変くだけた格好をしていますけど、やはり、ちゃんとした席に出る時は、着物のほうが、わたし自身は好きですし、落ち着くんですね。

着物の方が多いいんですけども、どうしても一度きちんとした席で着ますと、次に着るのがなかなか不可能なんです。だから、そういう意味では、いつもたぐさんあるというのではなくて、次から次へという形になってしまいうんですけども。

司会 大変ですねえ。ぼくは、新聞からテレビへ行

って一番びっくりしたのは、タレントの方、毎回違うものを着ていらっしやいますね。

吉永 はい。そうですね。

司会 あれ、たまっちゃって、どうするんですか。吉永 わたしの家は大変狭くて置けないものですか、お友達に分けてあげたり、チャリティーのような形で持っていったらどうか、そういうように処理しています。

司会 どうぞチャリティーがあるそうですから、その時はぜひ、会員の奥様方もひとつ……。(笑)

カラッとした働く男の背中が魅力

村尾 吉永さんの男性観をうかがいたい。お連れ合いの方はまったく別といたしまして、一般論でいいんですが、理想の男性はどういうふうなものと考えていらっしやるか。

吉永 小さい頃から仕事をしてまいりましたために、職場でたくさんの男性を見てきているんですけども、やはり、一生懸命仕事をしている姿というのは、何よりも素敵だと思えます。そういう一生懸命仕事をしている男性の背中に魅力を感じますけれども、ただただ仕事、というんじゃないで、やる時はピシッとやって、あとはどつちかといえはニューモアの明るくタイプの人っていうのが、わたしには、理想の男性なんですけれども。

司会 岡田太郎君もそうですね。(笑)

吉永 (間を置いてから)そうですね。

司会 吉永さんの右隣に座っている広瀬さんは、東京新聞の論説委員長でいらっしやいますが、さっきか

ら一生懸命メモを取られて、テレビしているのか、本当はききたいことがだいぶおありだったようですが、どうぞ……。(笑い)

広瀬 (東京) 子供のような質問をしますが、動物は好きですか。犬と猫、どちらが大好きですか。植物では、どんな花が大好きですか。野草が大好きですか。それとも、やはり、園芸種の手の込んだものが好きですか。動物と植物についての質問でございませう。

動物では馬 植物では立葵が好き

吉永 動物で一番好きなのは、やはり、馬なんです。まのできれば、もうちょっと上手になれば、自分の馬を持ちたいなあ、競馬のほうじゃなくてですね、乗るほうの馬を持ちたいと思うんですけども。ずっと飼っておりましたのは犬で、わたしが子供の頃から二十歳ぐらいまで一匹の犬と一緒に過ごしたんですけど、あまりに利口な犬で、よくなついてくれたものですか、その犬が死んでから、どんな動物を飼っても愛情が移らないというか、そんな感じになってしまいました。もう動物を飼うのはやめてしまったんですけども。猫は、どちらかという苦手で、目と目を合わせると、この猫、何を考えているんだろう、というようなことになってしまいました、どっちかといえば犬タイプでございます。

植物では、よく田舎のほうで農家の庭先なんかには揺られてる立葵の花がとても好きです。(会場から「ほー……」の声) 東京で育ちましたために、この花は、あまり東京にはなかったんですね。一度ロケに行っ

て、美しいな、と思ったんです。たまたま十八歳ぐらいの時に、山梨のほうで立葵がとってもきれいなところがあって、そこへロケに行っていた時に、わたしの祖母が亡くなったもので、その時の光景が一枚の絵のように残っていて、いつも立葵の花を見ると懐しくなるし、胸が一杯になってきちゃうようなところがございませう。別に徳川家とは関係ないんですけども。(笑い)

広瀬 ついでに、季節はいつが大好きですか。

吉永 冬が好きです。

司会 ほー、どうして？

吉永 大変汗かきで、夏になると、犬と一緒にハーハーいってしまつてダメなんです。(笑い) わたしたちの仕事は、どうしてもお化粧をして外へ出なければならぬので、顔をザブザブ洗うということができません。冬のほうが、汗をかくことは少ないです、それと寒さっていうのは身が引き締まりますし、寒い場合はたくさん着ればすみますけど、暑い場合は、もうどうにもならないわけですね。それとあと、雪が好きで、山が好きで、それでスキーが好きというところで、どうしても冬が好きなんです。

自立のためにもマネージャー持たず

司会 先ほどの今さんの質問の中で貯金通帳の話が出ましたが、吉永さん、たしか、マネージャーをお持ちになつていないんですね。

吉永 はい。いまはひとりです。

司会 実は、今日出たただくのどなたにお話したらいいかというので、結局、私と同じ職場にいるお

連れ合いにお願いをしたんですけども。普通は組織に属するか、マネージャーを持たれるかですが、ソロボン勘定まで全部ご自分でおやりになる？

吉永 はい。わたしの場合は、たくさん仕事はしないものから、いただいた仕事を自分で選択して決めないと、本当に数少ない仕事ですので、あとで後悔したくないですね。自分が選んでやった仕事だったら、もしうまくいかなかったら、自分が責任を取ればいい。マネージャーがいて、マネージャーがこの仕事はやったほうがいいって言って、じゃ、やりましょうってやった場合、よかつた場合はいいんですけど、悪かつた場合はやはりマネージャーのせいにすると思うし、そういうことだと、いつまで経っても自立できないんじゃないかな、というふうに思つたんです。

わりに切羽詰まつた時には、自分でこうと決めるタイプなんですけど、それまではわたしどちらかという優柔不断なんです。結婚するまでは、親にとつても保護されていましたし、仕事の面ではマネージャーがいて、きちんとレールを敷いてくれました。そのため、一人の人間として、女として足りない部分という自立できない部分というのを、自分でさうですねえ、いまから五年ぐらい前に感じて、よし、大変だろうけど、ひとりでやってみよう、というふうに決心して、ここ五年ぐらいは自分で仕事を選んでやってきました。

まあ、ギャラの交渉なんか、最初は自分でやっていたんですけども、大変なつたばいまして、また相手のプロデューサーの方も、わたしがお金の話をする、なんかとても疲れるらしいんですね。(笑い) ですから、それ以降あんまり自分のほうからお金の話はしな

いで、相手の方に大体決めていただいて、ダメな場合は、またお話をするというような形にしています。先方に決めてくださいって言うと、自分が考えていたより少し高く言ってくださったりする方もございまして（爆笑）、やっぱり、そのほうがいいような気がいたします。（笑い）

確定申告も自分で行きます

司会 三月の確定申告は自分でおやりになる？

吉永 はい。どんなことがあっても必ず自分でまいります。これだけは。

司会 自分で計算して、自分でお書きになって？

吉永 いいえ、計算は税理士の方にやってもらいます。領収書を集めたり、全部チェックして、交際費とか、衣裳代とか、そういう整理は自分でやります。

杉本（博報堂） 数少ない仕事をお選びになって大事に取り組んでいらっしゃるといふうかがいましてけれども、お仕事の依頼といいますか、注文は、映画でもテレビでもコマーシャルの場合でもたくさんあると思うんですが、そういう時の選択基準といいますか、（笑い）どういふものだったら受けよう、というところをお聞かせ願えればと思います。

吉永 基本的には、その役が好きか嫌いかということとで選びます。不器用で、どんな素敵な役でも、その役が好きにならないとできない。また、悪女でも好きな悪女というのがあるんですね。大変感覚的な選び方をするんですね。あとは、プロデューサーの方、監督さん、俳優さんたち、この人たちとだったら、何か

いい仕事ができそうだな、というような自分の予感とか、いままで一緒にした仕事での経験などから選んでいます。ですから、どうしても何度か仕事を一緒にした方たちのものが多くなってしまうんです。ですから、これからは少しずつ映画でいえば若い監督さんと仕事をしてみるとか、そういうことも必要だと思わなくては。ただ無理にいまそういうふうにしても、わたしの中に、そういう柔軟な演技力とか態度がないとできないものですから、時期を見てそういう機会があれば、というふうに思っております。

「動乱」出演で映画への情熱再燃

司会 中国の文汇报の劉さん、いかがですか？ 普通はこちらから指すことはないんですが。

劉（個人） ぼくもサユリストの一人です。前から尊敬しているわけです。小百合さんの映画は、中国にはまだそんなに多くは紹介されていないんです。けれども、去年は、健さんと共演した「海峽」を中国でやって、随分評判になっていきます。これから、たとえば「キューボラのあな街」のようなタイプの映画が——ぼくは見たことあるんですけど——もし中国に紹介されると、多分、中国で百恵さん以上の何倍ものファンを得ることになると思います。

高峰秀子先生の随筆を読みました。高峰さんの経歴と小百合さんの経歴少し似ているところがあります。子役時代からずっと何十年も映画をやっていた方ですから。あの人は随筆の中で、つねに映画に対して厭だ、厭だ、嫌いだと、そう言いながら仕事をしていた、と書いています。そう言いながら五〇年ぐらいい映画をやっ

ていた。先ほど、小百合さんは映画が非常に好きです、と。好きな仕事をしているわけですから、それでも最初の頃は、やはり、アルバイトのつもりで仕事をしていた。いつから映画が、本当に好きになったのか。映画の魅力、映画で一番好きなのところはどこをお話ください。

吉永 最初の頃は、やはり、生活のためにやるというのと、物理的に、とにかく徹夜ばかりの仕事で、こんなにつらい仕事ってあるんだらうかっていうことで、フーフー言っておりました。また役者というのは、皆さんと違って、人前でラブシーンなどを演じなければならぬんですけれども、ちょうどまだ十五歳だったと思うんですけど、ある大変年輩の喜劇俳優さんと初めてキスシーンをしなきゃならなくなつて、どうしてこんなことをしなければならぬのかって、どうして、家に帰ってワーワー泣いて、「もう仕事はやめます」って言った記憶もございします。

いつから映画を本当に好きになったのか、というのはとても難しいんですけども、やはり、最近……。五年間ぐらいい映画に出ない時期がございまして、まったく映画界から離れていたんですけども、そして「動乱」という映画に出て、映画に対する情熱というものが、自分ではもう忘れちゃっていたのに、みんなの中にはまだ残っていた、と実感したのです。いま踏んばらないと映画の灯が消えちゃうみたいな危機感も、その時に感じたんですね。それでだんだん自分の中で、映画に対する思いというか、愛情が強くなって、それがいまだ強く残っている最中のような感じがいたします。ですから、本当に好きになったのは、最近ということだと思わります。

国吉(沖縄タイムス) 最近、NHKの「夢千代日記」の再放送まで見てしまったんですけれども、今日、話を聞いていて感じたことをちょっとお聞きしたいと思っています。小百合さんに、子供がいっぱいしゃるかどうかよく分からないんです。子供がいっぱいしゃれば、子供についての感想をお聞きしたい。もし子供がいっぱいしゃらない場合は、なぜつくらないのか。

吉永 ……(笑い)

国吉 これからでも、子供ができたら、どういった子供に育てていきたいか。そういったことをお聞きしたいと思います。

吉永 子供はおりません。大変子供が好きで、もし女優にならなければ、幼稚園の保育さんか、小学校の先生になりたいと思っていた時期もございます。それぐらい子供が好きです。わたしのきょうだいは、両方も教育関係の仕事をしているんですけれども、子供が好き過ぎて逆に怖くてつくれない、というところがございました。いま子供を、自分が仕事を持ちながらつくっても、土の上で遊ばせてやることができないとか、カギっ子にしたいとか、こんなひどい受験戦争の中で塾なんかに通わせたくないとか、そういう思いばかりが先行しちゃって、結局、子供をつくる時期を失ってしまったんですけれども。

もし、そうですね、仕事をしていなければ、四、五人子供を生んで、子供を育てるといふ仕事を一生懸命やりたかったと思うし、そういう意味では、いまちょっとこれだけは女として残念だな、と思っっていることです。

不器用なのであくまで自然流で

司会 戦後四十年ですから、吉永さんも〇〇歳になるわけで、これからどういう女優さんに——ああいう俳優でありたい、あるいはあの人を尊敬するという人が具体的にいらいらおきかせいただきたい。

吉永 これから長く女優をやっていくためには、やはり、演技力というのが必要だと思っんですけれども、どっちかっていうとテクニクで見せるタイプではないし、不器用なほうですし、自然に、自然流で、あの人お芝居してないんじゃないかな、と思われるような芝居をし続けていきたいと思っんです。そういう意味では、男性ですけど、笠智衆さんのような雰囲気にもし年齢を取っていったら、というふうに思っっています。映画を愛して、ずっと映画の中で生きられたという点では、田中絹代さん大変尊敬しています。この次の次の仕事で、わたしが田中さんを演じることになりそうなんですけれども、田中さんは「楢山節考」の時にご自分の健康な前歯を四本抜いて、それで役に組み込まれた、というお話を聞きまして、わたしには、とてもそこまでできない、という思いがするんです。ですから演技的にはとても田中さんのように、本当に鬼気迫るような、たとえば「サンダカン八番娼館」のおばあさんの役とか、「楢山節考」のおばあさんの役みたいなのではできないと思っんですけど、映画に對する姿勢という点では、田中さんに学びたいと思っんです。

司会 若い時、大変苦勞もされたし、結婚も最初の頃はご両親の完全な賛成を得られなかった。いま、過

去をふり返って見て、幸せだったとお思いになりますか。仕事も家庭も含めて。

吉永 こんなに自分で思い残すことなく、いままで生きられたっていうのは、大変な幸運としかいいようがない感じがするんです。いろんな時に決断して、自分でやってきたんですけれども、その時にはそれがよかったかどうか分からないんですけれども、あとになって思い返してみると、自分自身にとっては、やっぱり、あの時決断して、この道を歩いてきてよかったというふうに思えるのは、幸せなことです。後悔することがないというのは、とても自分にとっては素敵なことだと思っっています。

今日を精一杯生きて明日へ

司会 これからもその道を歩いていらっしやるわけですね。

吉永 そうですね。ただ、何年でこうしてという計画を持たないタイプですので、今日を精一杯生きて、それが明日につながればと思います。さっき笠智衆さんと田中絹代さんというお二方のお名前を出しましたけれども、もう一人先輩で原節子さんという方がいらして、四十二か三の時にお辞めになったというのをうかがっているんです。わたしの中にも、その原さんの生き方っていうものがまったくないわけではなく、ある時期で出演することを辞めて、裏方のほうにまわるとか、そういうことも考えなくはないんですけど、まあ多分……、多分、俳優としてやっていくとは思っます。とにかく今日を生きていくことが、明日につながるというふうに思っって、大変無計画ですけれども、ひ

たむぎに生きていきたいと思っています。

司会 グレタ・ガルボ、ご存じですね。

吉永 はい。このあいだ雑誌で、写真を拝見しましたけど。

司会 原さんよりもグレタ・ガルボみたいな感じは……？

吉永 そうですね。引退するということもね、ほんとは考えなくはなかったんですけど、いまみたいにもマスコミがいろんなところからカメラで狙ったりしていると、どうしても写されてしまうでしょう。(笑い)

そうした時に、ファンの方が受ける衝撃も強いと思いますし、それよりは自然な形で、自然体で俳優としてやっていくほうが、やはり、いいのかなあ、というふうには思っています。

司会 つまり、マスコミが追い駆けるほうが俳優を辞めなくてすむわけですから、やっぱり、われわれが追い駆けることにも意味があるということになるわけでありまして……。(笑い)

ご参考までですけれども、きょうちょっと会社でもいろいろ材料を仕入れてまいりまして、たとえば吉永さんのお連れ合いのところへ同僚が遊びに行くと、ご主人は、いろいろ小さいお料理がいっぱい出てくるのがお好きなんだそうですね。

司会 そうです。(笑い)

料理は好きだが後かたづけは……

司会 実においしいのが、次から次へ出てくるんだそうですね。お料理もよくなさるんですか。

吉永 ええ、つくるのは大変好きでやるんですけれ

ども、かたづけるのが非常にいやでございまして、そのへんがちよっと……。(笑い)

司会 かたづけけるほうはお連れ合いがなさるわけですね。

吉永 あまりひどい時はやってくれます。(笑い)

山坂(日経) 先ほどのオール5だった、というお話に関して質問があります。吉永さんの「寒い朝」が大変好きです。しかし、そのレコードを聴いて、そのあと同じ映画人の倍償千恵子さんの「下町の太陽」を聴くと、その落差がく然ともするんですが。(笑い)、最近、吉永小百合さんの歌はどこへいったんでしょうか。

吉永 あのオ(ややうつむき加減に)、一応去年レコードを二枚出しました。「天国の駅」という映画の主題歌で、「夢さぐり」という井上陽水さんの作曲、作詞は来生えつこさん。もう一つは「夢千代日記」の組曲と言いますが、そんなのをやりましたけれども、歌は大変不得意な分野でして、趣味で唄う分にはいいですが、レコードになると、いつもわたしも恥ずかしくなります。

ジエームスン いままでアメリカの映画に出たことは……。

吉永 ございません。

ジエームスン 依頼があったことはあるんですか。

吉永 アメリカからはございません。

ジエームスン 私は不思議に思われるんですが、あった場合にはやりたいとお思いですか。

をしたと思いますけれども。

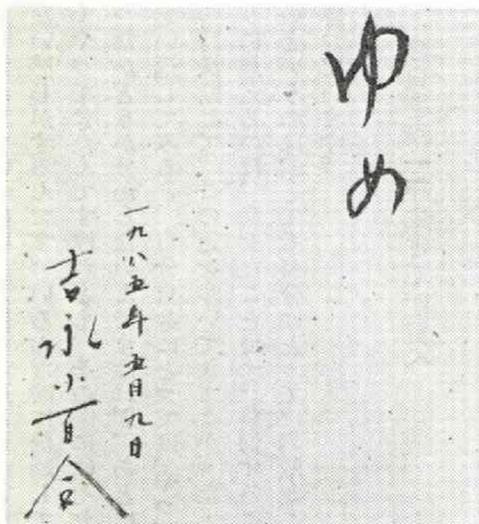
ジエームスン 日本語でできるような役だったら、アメリカの監督の下での映画でもやってよろしい……。(笑い)

吉永 そうですね。日本語で喋っていいっていうんだったらば出たいと思いますけれども、なかなかそういうのはないでしょう。

司会 残念ですが、お約束の時間です。吉永さん、今日はどうも大変ありがとうございました。

吉永さんの署名をご披露いたします。筆で「ゆめ」と書いてございます。記念に記者クラブのシルバの万年筆を差し上げます。きょうの出演料は、これだけでございますから。

吉永 ありがとうございます。(拍手)



(文責・編集部)